

# 向島撮影所と雑誌『向島』

大久保 遼

1922年末、所属していた新派俳優のほとんどが国活へ移籍したことを契機として、向島撮影所は新劇から岡田嘉子や夏川静江といった女優を迎えた。これにより日活向島は女形を起用していたそれまでの方針を転換し、女優中心の映画製作を進めていくことになる。この向島の一大転換後に創刊されたのが、雑誌『向島』であった。撮影所の沿革や撮影された映画の詳細については展示や図録の他の解説に委ね、この小論では、雑誌『向島』の概要と、記事に記された撮影所周辺のエピソードをいくつか紹介していきたい。

『向島』は1923年2月に創刊された。2号は4月に発行され、以下6号までは毎月刊行されているが、関東大震災により一時的に休刊。11月に「震災号」が発行された後、撮影所の京都移転にともない『日活』へと改題されている。奥付によれば、東京市内では各書店、絵葉書店において、その他の地域では日活直営の映画館か特約館において発売されていたとのことである。販売取次店は横浜、大阪、名古屋にあり、「十数万を超えんとする地方読者」（震災号・編集後記）を抱えていたというから、撮影所のある東京だけでなく、広く各地の日活ファンに愛読されていたようだ。

向島撮影所が活躍した時期は、映画雑誌の創刊が相次いだ時期でもある。たとえば1913年創刊の『活動之友』『フィルム・レコード』（後に『キネマ・レコード』へ改題）をはじめ、『活動写真雑誌』『キネマ』『活動之世界』『活動画報』『キネマ旬報』などが、この時期に創刊されている。また映画会社系列の雑誌として、『向島』以前にも吉澤商店の『活動写真界』や、横田商会の『活動写真タイムス』、Mパター商会の『活動写真』が刊行されていた。しかしながら、作品紹介や映画評論を中心とする映画雑誌とは異なり、『向島』は、あくまで向島撮影所の動向をファンへ向けて発信するための雑誌であり、日活のファン雑誌的な色彩のつよい媒体であった。

たとえば創刊号に掲載された「発刊の辞」を見てみよう。

本誌は、世人の既に疎せんとしつつある活動写真雑誌とは全然その趣を異にして、専ら向島撮影所作品の論評。紹介及び各種の計画、撮影苦心談、



図1 創刊号表紙

所員の動静、俳優の逸話等を迅速確実に報導して、以つて一般のキネマ、ファンに対する映画趣味の啓発を図ると同時に作品の向上発展を期せんとす。

(31頁)

発刊の辞によれば、この雑誌が目指したのは、一般の映画雑誌とは異なり「専ら向島撮影所作品の論評。紹介及び各種の計画、撮影苦心談、所員の動静、俳優の逸話等を迅速確実に報導」することであった。また撮影所次長であった小園末徳も、『向島』の特徴を「普通の営業本位の活動写真雑誌と異なり、素人同人の趣味性に発足し営利観念を離れた純真の快挙」（32頁）と述べている。

営利を離れた「素人同人の趣味性」があらわれているのは、撮影所のスタッフ自身による記事の充実だろう。たとえば創刊号では、俳優の小泉嘉輔が「表情に就て」、撮影技師の高坂利光が「夜間撮影に就て」、技髪師の竹前甚彌が「髪に就て」という記事を、俳優時代の稲垣浩が「小詩 支那街」「昔の手帳から」という自作の詩を掲載している。技髪師という職業について、竹前自身が「元来、日本の劇界に於ては私等演劇技髪師を非常に低級なる者として扱って居ます。日本美術の一として恥しくない。欧米の芸術家も推賞して止まない私達の仕事が、何うして下級的なものとして取り扱はれなければならないでせうか」（43頁）と訴えているのも、撮影所の声を伝える雑誌『向島』ならではのことでだろう。

そのほか『向島』には、「向島撮影所製作映画の梗概」「向島撮影所だより」といった映画史の資料として重要な記事だけでなく、撮影中のこぼれ話やロケーション時のスナックショット、撮影所スタッフから他のスタッフ個人宛の手紙、

匿名の対談、スタッフによるエッセイなども掲載されており、当時の撮影所内の雰囲気やうかがい知ることのできる貴重な雑誌といえる。

また読者投稿欄「世間の声」（2号より「影にそふ声」に改題）が毎号設けられており、日活映画や雑誌に対するファンからの要望が紹介されている。基本的には日活映画ファンからの好意的な投書が多いが、ときには「向島映画も愈々映画劇に向かって来たが未だ声色説明が、以然として有る様では駄目だ、兎も角早く単独説明に変わって欲しいものだ」（6月号）といった「映画劇」派からの批判も掲載されている。こうした投書を撮影所のスタッフが実際にどれだけ目にし、参考にしたかは定かではないが、ファンにとっては撮影所に対して意見を表明することができる得難い機会であっただろう。

こうした投書や『向島』の講読だけでは飽き足りないファンのために、撮影所は定期的にファンと交流する催しを企画していた。その機会の一つが「向島座談会」である。『向島』5月号には、「第五回向島座談会」の広告が掲載されている。

皆さんと楽しく御話する日が漸く決定致しました。スタジオの連中も其の日を楽しみに腕に縋りを掛けて居ります。当日は混雑の恐れが有りますから可相成前以つて御通知を願ひます。

時日 四月二十八日（土曜日）午後五時  
会場 上野公園大仏堂脇韻松亭  
会費 金壹圓（当日御持参）

茶菓子弁当を呈し山本嘉一氏新撮影プロマイド、其の他寄贈品の分配、牧野省三氏より映写機壹台寄贈あり抽籤に依つて会員へ進呈、当日は山本嘉一氏は勿論スタジオ側より監督、技師、俳優の全部、説明者側より石原、山口、高橋の諸氏、来賓として警視庁橘高廣氏、川柳大家坂井久良岐氏、キネマ旬報山本緑葉氏、活動雑誌吉山旭光氏其の他斯界で有名な方々が多数出席されます

主催 山本嘉一後援会  
賛助 向島映画芸術社 日大映画会

この座談会には、撮影所のスタッフのほとんどが参加し、日活の説明者が3人、また来賓としてキネマ旬報の山本緑葉、後に『日本映画事物起原』を著す吉山旭光が出席しているから、賑やかな会合であったようだ。この「向島座談会」の記録が、次号の6月号に掲載されている（22-23頁）。記事によれば、山本嘉一の挨拶、来賓の講演、日大ハモニカ・ソサイエティーの合奏のあと、メイン・イベントとして開催されたのは「映画模擬国会」であったという。どうやら撮影所スタッフ、ファン、来賓が、おのおのの立場から撮影所のあり方や日活映画について、「スタジオ党」「不安党」（ファン党）「映画統一党」に分かれ模擬国会というかたちで意見をたたかわせる催しであったようだ。



図2 6月号表紙

こうした向島座談会や読者大会、雑誌の投書欄は、ファンにとっては撮影所のスタッフと交流する場であり、スタッフにとってもファンの声を直接に聞くことのできる機会であっただろう。『向島』は座談会や読者大会の広報や報告の媒体として使われるとともに、誌面を介してファンと撮影所をつなぐメディアとしても機能していた。

ただし、こうしたファン雑誌としての『向島』に変化の兆しが見られるのが、7月号のことである。この号から編集部のスタッフが一新、主幹に元新聞研究所参事の村上脩を迎え、編集顧問に新進の洋画家であった柳瀬正夢、キネマ旬報社より内田岐三雄、池田照勝が参加することになった。このとき、新編集長の村上は、巻頭言で次のような方針を打ちだしている。

映画の将来は果たして奈辺に向かふ可きか。

吾人は断言する。そは大いなる意味の、ジャーナ

リズムの中に抱和される可きであると。例へばブロード・キアスチングを耳に訴へる新聞であるとするならば映画は動き、而して眼に訴ふる新聞であつて、従来の新聞は之れが記録的意味の範囲に、当然変質される可きものである。

「映画の新聞化」を掲げる新編集部の方針は、あくまで「映画趣味の啓発」「素人同人の趣味性」を謳う創刊号からの大きな転換を意味していた。しかしながら、経緯の詳細は不明であるが、この新編集部は次の8月号をもって早々に解散することになる。そして9月1日に関東大震災が起り、向島撮影所は被災。一時的に顕在化した、ファン雑誌という既存路線と「映画の新聞化」の方向性との相剋という事態はうやむやになったまま、『向島』も休刊を余儀なくされた。

震災による撮影所の被害は、撮影所次長の小園が、「全く不思議と云はれるほど軽微なものでありました」（震災号・22頁）と述べているとおり、倉庫の外壁が崩れたものの建物の倒壊は免れ、スタッフも無事であった。しかし、震災号が発行されたのは、ようやく11月になってからのことである。その後、撮影所の京都移転にともない、『向島』も『日活』へと改題されることとなった。こうして一年に満たない『向島』の刊行期間は終わりを迎えたのである。

＊

最後に『向島』の後継誌である『日活』の第1号から、震災後の映画制作について語った映画人たちの言葉をいくつか紹介したい。

『日活』の冒頭には、支配人・元向島撮影所所長の根岸耕一による「日活の今後の方針」という記事が掲載されている。根岸によれば、震災のあとで人々は「悲劇の免疫性」に罹っているという。このような状況では、「従来の映画に現れた悲劇のような手法で、微温的な態度で観者の感情を唆ろうとしても、何等の効果を揚げることが出来ない」。したがって、「従来の本邦の活動写真製作やその興行方法に、今度の罹災を機として、一大変換を生ずるであろうこと」を根岸は予想している。

「一大変換」の予想にとどまる支配人に対し、監督たちは、その変化を映画として具現化する必要に駆られていた。松竹キネマ研究所で『路上の靈魂』を監督し、前年に日活へ入社したばかりの村田実は、「高級映画を作れ」と題した記事



図3 『日活』創刊号表紙

を『日活』に執筆している。村田は自らを「表現派芸術の渇仰者」と呼び、スタジオや自身の生活の内幕がどうであろうと、「高級映画を作るべく不斷の努力をつづけるのです」と記している（22-23頁）。これに対して『旅の女芸人』『人間苦』などを監督し、向島時代から日活を支えた鈴木謙作は、「何を書く」というエッセイを寄稿している。そのなかで鈴木は、「日本の映画劇って、アリヤ、何だい」と怒鳴る友人の「一体、どうなるんだい」という詰問に、ただ「解らない」と答えざるをえなかったことを振り返っている（24-25頁）。一方、溝口健二は、『日活』に自らの主張を掲げることとはなかった。その代わり、被災した向島撮影所で溝口が監督し、製作された『廃墟の中』の梗概が誌上に掲載されている。

変化の兆しは見える。しかし未だ明確な像を結ばない。—『日活』の誌面からうかがえるのは、そんな撮影所の姿だろう。『向島』の震災号と『日活』は、関東大震災に直面した映画人たちの模索の一端を私たちに伝えてくれる。後の溝口健二らの華々しい活躍は、こうした受難と模索の期間を経てのことであった。雑誌『向島』は、当時の撮影所やファンの動向を現在に伝えるだけでなく、震災前後の撮影所の様子を垣間見せてくる点においても、貴重な雑誌であるといえるのではないだろうか。

（東京大学大学院博士課程/早稲田大学演劇博物館RA）